

5/20(水)・21(木)学芸員が来日し作品公開 ポーランドの国立博物館所蔵《芦雁図屏風》 東北芸術工科大学が初となる海外文化財の本格修復へ —日本とポーランド、保存哲学の違いを越えて取り組む3カ年プロジェクト—

東北芸術工科大学（山形市上桜田／学長 中山ダイスケ）文化財保存修復研究センターは、ポーランド・ポズナン国立博物館所蔵の《芦雁図屏風（Wild Goose and Reeds）》の本格的な解体修理に着手します。

本事業は、公益財団法人住友財団による2026年度「海外の文化財維持・修復事業助成」を受けて実施するもので、2026年5月から2028年12月までの約3カ年にわたり取り組みます。なお、本センターが海外所蔵文化財の修復を正式に受託するのは、今回が初めてとなります。



写真：今回修復する作品《芦雁図屏風（Wild Goose and Reeds）》

■海を越えて山形に届いた、一隻の“傷ついた屏風”

修復対象となる《芦雁図屏風》は、19世紀に制作された六曲一双の屏風です。水辺にたたずむ芦と雁を描いた「芦雁図」は、日本絵画において古くから親しまれてきた伝統的な画題の一つです。

現在、本作品は深刻な損傷を抱えています。長年にわたる保存環境の悪化により、水濡れによる大規模なシミや変色、和紙繊維の弱体化、カビ痕、絵具層の剥落、虫損、破断などが確認されており、屏風としての強度も大きく損なわれています。裏打紙や装飾紙（唐紙）、骨組みにも著しい劣化が見られ、このままでは恒久的な保存が極めて困難な状態です。

この度、さまざまなご縁により、本格的な文化財保存修復の専門拠点である、本学文化財保存修復研究センターが本作品の修復を担うことになりました。



写真：本学への移送のため
屏風を梱包する博物館スタッフ
（提供 ポズナン国立博物館）

■「全部を残したい」

日本とヨーロッパ、文化財修復の哲学が交差する

本プロジェクトの特徴は、修復そのものだけではありません。日本の伝統的な修復では、傷んだ裂地や裏打紙を交換し、「本紙」を中心に保存する考え方が一般的です。一方、ヨーロッパでは、装飾紙や木部を含めた“作品を構成するすべて”を保存対象とする思想があります。

今回、ポーランド側からは「唐紙も含め、可能な限り既存材料を残したい」という意向が示されました。その価値観の違いは、住友財団への助成申請や修復方針の協議のなかでも、たびたび議論となりました。しかし、こうした対話こそが、このプロジェクトの大きな意義でもあります。

「日本のやり方を押し通す」のではなく、異なる保存哲学を尊重しながら最適解を探る——。
本センターにとっても、研究員にとっても、新たな挑戦となります。

■ポーランドから学芸員が来日

修復対象作品の公開・取材対応を実施

作品は2026年5月上旬にポーランドを出発し、現在、日本国内へ輸送中です。今後、本学に搬入され、5月20日（水）・21日（木）の2日間、修復前の状態公開および取材対応を行います。

これに併せて、ポズナン国立博物館の学芸員・コンサバターであるジョアンナ・ココク（Joanna Kokoc）氏が来日し、取材対応に同席します。

-作品公開・取材対応の概要

日時：2026年5月20日（水）・21日（木）10:30～15:00

会場：東北芸術工科大学 文化財保存修復研究センター（東洋絵画修復演習室）

内容： ・修復対象屏風の撮影 ・ジョアンナ・ココク氏へのインタビュー
・修復担当研究員への取材

※取材日時は可能な限り各社のご都合に合わせて個別に調整いたします。

※ジョアンナ氏への取材には、英語通訳者の同行を推奨いたします。

-取材申込について

取材をご希望の場合は、2026年5月19日（火）正午までに、別添の取材申込書をファックスいただくか、下記までご連絡ください。

■取材申し込み・お問い合わせ先

東北芸術工科大学 文化財保存修復研究センター事務局

地域連携推進課・須貝

TEL：023-627-2218

※本修復事業は、公益財団法人住友財団「2026年度 海外の文化財維持・修復事業助成」により実施します。

東北芸術工科大学 地域連携推進課 宛て

取材申込書

FAX: 023-627-2081

ポーランドの国立博物館所蔵《芦雁図屏風》
東北芸術工科大学が初となる海外文化財の本格修復へ
—日本とポーランド、保存哲学の違いを越えて取り組む3カ年プロジェクト—

貴社名

参加者代表名

取材ご希望日時

代表者携帯番号

_____ — _____

メールアドレス

_____ @ _____

参加人数

_____ 名